

2022年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	ケイパビリティ・アプローチからみた音楽教育における社会的包摂 — 幼少期の移民の背景をもつ子どもを対象とした実践的研究 —
キーワード	① 音楽教育、② ケイパビリティ・アプローチ、③ 社会的包摂

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ジュゼプ フェラン Josep Ferran
配付時の所属先・職位等 (令和4年4月1日現在)	安田女子短期大学 保育科 講師
現在の所属先・職位等 (令和5年7月1日現在)	安田女子短期大学 保育科 講師
プロフィール	広島大学教育学研究科教育学習科学専攻博士課程後期修了（博士教育学）。博士論文題目「音楽教育における移民の背景をもつ子どもの社会的包摂:ケイパビリティ・アプローチを視点とする質的研究」。2018年～2019年にかけて官民協働海外留学支援制度 ～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムの後援を受けてスペインバルセロナ自治大学にて研究留学。日本で生まれ育ったスペイン人として、異文化の狭間で形成されてきたアイデンティティを活かし教育研究活動を進めている。

1. 研究の概要

この研究は、音楽教育がもたらす社会的包摂に焦点を当て、幼少期の音楽教育の実践方法に新しい視点をもたらすことを目的としている。

社会的包摂という概念は、人が社会的に排除されるという状態の「社会的排除」の対義語として用いられている。20世紀末からは人の生活の豊かさとしての経済成長（国内総生産：GDP）だけでなく、人間の尊厳と自由の拡大を基準とする新しいパラダイムである人間開発アプローチ（Human Development Approach）が登場し始めた。このアプローチは、人々の能力の発展や社会的包摂の向上に焦点を当てるものでその構築には、インドの経済学者セン（A. Sen）と哲学者ヌスバウム（M. C. Nussbaum）による共同研究である「ケイパビリティ・アプローチ」が大きな影響を与えている。

筆者は、現代社会における社会正義の問題に対して解決策を提唱するケイパビリティ・アプローチを理論的枠組みに、音楽教育によってもたらされる社会的包摂が音楽教育のどのような質的価値に根ざしたものなのかを追究してきた。これまでの研究結果から、言語的理解の差異を軽減する非言語的コミュニケーション（歌唱や演奏、身体表現等）及び、成果物に対する厳格な評価基準に制限されない主体的な即興表現（improvisation）と創作（music making）に、音楽教育における社会的に不利な子どもの包摂の手掛かりがあると推測し、本研究を始動させた。

2. 研究の動機、目的

現代の保育現場や教育現場では、子どもたちの多文化化と多様化がますます進んでおり、す

すべての子どもの尊厳を守り、教育の機会均等を確保することが急務となっている。

先進国を中心に、移民の背景をもつ子どもの増加による社会的な課題が山積みのなか、各国では、これまでに芸術教育アプローチによる教育イノベーションが試みられてきた。例えば、ベネズエラの音楽教育プログラム「エル・システマ」やドイツのドキュメンタリー映画『ベルリン・フィルと子どもたち』は、音楽教育によって社会的に不利な状況下にある子どもの支援に成功し、大きな反響を呼んだ事例である。また、ユネスコ会議「第1回世界芸術教育大会」(2006)では、芸術教育のためのロードマップが策定され、芸術教育の目的に、教育の質を向上させること、文化的多様性の表出を促進することなどが含まれ、現代社会の諸課題を解決する有効な手段として芸術教育の有用性が謳われている。さらに、欧州の研究を中心に、音楽教育によって社会的に恵まれない子どもの学習能力が向上したとする結果や(Kraus et al., 2014)、多文化的環境下における文化受容や社会的結束をもたらす(Frankenberg et al., 2016)などマイノリティの子どもにおける転移効果も確認されている。

本研究では、上記を踏まえて、ケイパビリティ・アプローチの基礎概念「人は実際に何ができるのか、どのような状態になりうるのか」を理論的枠組みに、なぜ非言語的コミュニケーション及び即興表現と創作が社会的に不利な子どもの包摂を促すのか、またどのような条件下でそれは成立しうるのか検討した。

3. 研究の結果

本研究では、東海地方の保育・初等教育養成課程の大学生を対象に、外部講師として演習を実施した。本講義は、保育の五領域(健康、人間関係、環境、言葉、表現)のうちの「保育内容表現」に関する科目である。講義の内容は、異文化体験を軸とした音楽的取り組みを行う前半と、わらべうたの表現を非言語的コミュニケーションや即興・創造的活動の視点から捉える後半に分かれた。本講義の運用言語に意図的に終始自身の母語(カタルーニャ語)を用い、多文化的な環境下における音楽的取り組みを再現した。また、実践的な課題に関する考察を行うために、複数の研究者によって実践の観察をフィールドノートとして記録し、後に録画データとフィールドノートを用いて協議を行った。そのほかにコメントシートで、異文化体験や非言語的コミュニケーションおよび即興・創造的活動をどのように受け止めているのか、収集し分析した。

学生のコメントシートからは、想定していたように言語的な指示や表現を理解できないなかで、身振り手振りなどのジェスチャーが研究者とのコミュニケーションに役立つことが裏付けられた。また、「外国につながる幼児もいる保育現場を想定して、音楽あそびに、即興表現、創作活動を取り入れましたが、どのような効果があったと思いますか。」という質問に対して、「言語的な理解や意志の疎通が取れないが、即興表現には『正しい表現』という概念がないため自己表現をすることが楽しかった」などの回答が得られた。

これらの結果や、観察記録に基づいた研究者間の協議によって、多文化的な環境で非言語的コミュニケーションや即興表現、創作を取り入れことは、異なる文化背景を持つ人々の音楽的価値観が理解され、社会的な調和や共生を促進させ、包摂的な教育的環境を構築するうえで鍵となることが示唆された。しかし、一定の音のパターンやリズム、応答的な音楽なのか、反復的な音楽かなどの音楽的なルールを提供するときとそうでないときで、対象者(本研究においては学生)の表現の幅に差異が見られることが明らかになってきた。

4. 研究者としてのこれからの展望

音楽教育は社会的に不利な状況に立ち向かうための力を育むことができるとされています。つまり、音楽教育によって自己実現や社会参加の機会が広がることが期待されています。そして、これまでの研究成果は、多文化共生を担う教育実践者に新たな知識と視点を提供し、多様な背景を持つ子どもたちが音楽教育の恩恵を受け社会に包摂されることが期待されます。現在は、子ども同士や教育者と子ども集団の間で営まれる「集団的な創造性」に注目し、新たな研究を進めています。現代において個人の能力としての創造性の育成に注目が集まる一方で、人々の尊厳と自由を保障することのできる包摂的な教育環境と「集団的な音楽の創造的行為」がどのように相互関連しているのか、究明していきたいと考えています。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

研究の遂行を可能にくださったすべての支援者、関係者に厚く御礼申し上げます。私はスペイン国籍でありながら、日本で生まれ育ったため、多文化的アイデンティティを活かしながら研究を進めて参りました。そのなかで、移民の背景をもつ子どもを包摂する音楽教育のモデルケースに衝撃を受けました。これまでの研究や教育経験から音楽教育と社会的包摂、つまり創造的な人々のつながりと個人の幸福には強い結びつきがあると確信しています。これからの日本の教育現場もより多文化化し、多様な国籍・文化の子どもたちの学び場となることが予想されます。少しでも子どもたちの学習や生活の質を高めることができるように、音楽教育に対する情熱を燃やしながらか研究を進めていきたいと考えます。

参考文献

- Frankenberg, E., Fries, K., Friedrich, E. K., Roden, I., Kreutz, G., & Bongard, S. (2016). The influence of musical training on acculturation processes in migrant children. *Psychology of Music*, 44(1), 114-128.
- Kraus, N., Hornickel, J., Strait, D. L., Slater, J., & Thompson, E. (2014). Engagement in community music classes sparks neuroplasticity and language development in children from disadvantaged backgrounds. *Frontiers in Psychology*, 5(DEC), 1-9.